

タイトル	「ふれあいサロン」のネットワーク化に関する考察
著者	菅原，浩信；SUGAWARA, Hironobu
引用	開発論集(99)：1-14
発行日	2017-03-17

「ふれあいサロン」のネットワーク化に関する考察

菅 原 浩 信*

1. はじめに

1.1. 問題意識

1.1.1. 地域コミュニティの活性化とは

近年、地域コミュニティにおいては、都市部・地方部を問わず、高齢者・障がい者の孤独死、「買物弱者」の出現、親子の孤立、「限界集落」の急増、といった様々な問題が生じている。これらは、地域コミュニティが疲弊・縮小していることの現れである。

一方、前述した高齢者・障がい者の孤独死だけではなく、子供に関わる事件・事故の増加等を背景として、安全・安心に暮らせるまちづくりが求められてきている。また、とりわけ、東日本大震災の発生以降、人と人とのつながりや絆といったものが重視されつつある。

こうしたことから、地域コミュニティの役割が見直されてきており、その活性化が急務とされている。特に、集落が広域に分散しており、人口密度が希薄である北海道において、地域コミュニティの活性化は早急に解決すべき課題である。

地域コミュニティの活性化とは、地域コミュニティにおいて、(1)人と人との「出会い・集い」が生まれ、(2)「出会い・集い」が継続的になっていくことによって「交流・ふれあい」に発展し、(3)「交流・ふれあい」をもとに「ネットワーク」が形成され、(4)「ネットワーク」による諸活動によって、新たに人が集まり「にぎわい」が創造される、という一連のプロセスの結果としてもたらされる¹。

したがって、地域コミュニティの活性化を図っていくためには、まず、その第一歩として、人と人との「出会い・集い」の場が必要となる。こうした役割を担うことのできるものの1つとして、コミュニティ・カフェがあげられる。

1.1.2. コミュニティ・カフェとは

これまでに、コミュニティ・カフェは、「人と人がつながることを大事にする、行くとほっとできる場所」²、「営利を求めらるだけでなく地域やその地域に住む人たちのための活動を目指す

* (すがわら ひろのぶ) 北海学園大学開発研究所研究員、北海学園大学経営学部教授

¹ 菅原 (2013b), p.38.

² 社団法人長寿社会文化協会 (2007), p.5.

『場』³, 「食や文化を通して地域のコミュニティの場として縁を広げることを目的としたカフェ」⁴, 等の様々な定義がなされている。また, 類似の概念として, コミュニティ・レストラン (『楽しく働き, おいしく食べる, くつろぎの場』をコンセプトとし, (1)地産地消を進める, (2)健康づくりを応援する, (3)地域の食卓・地域の居間を目指す, (4)誰でも安心して利用できる, (5)循環型社会づくりに取り組む, という5つの実践のうち, 1つ以上を行っている(あるいは, 実践することを目指している)もの⁵)がある。

これらをふまえ, 本稿では, コミュニティ・カフェを「飲食やイベント等が提供される, 主として地域住民の居場所・たまり場」と定義する。

コミュニティ・カフェは, ここ数年の間に全国各地で次々と開設され, その数は急増しており, その活動目的や活動領域によって, (1)高齢者福祉, (2)子育て支援, (3)まちづくり, (4)ワンデイシェフ, コミュニティ・レストラン, (5)スローカフェ, オーガニックカフェ, フェアトレード, (6)障がい者福祉, (7)コミュニティ・スペース, レンタルスペース, (8)国際交流, (9)若者の自立支援, といった様々なカテゴリーに分けられている⁶。これより, コミュニティ・カフェは, 幅広い分野で活動を展開していることがわかる。

また, コミュニティ・カフェは, その機能によって, (1)一般のカフェと同じように, 「飲食の提供」を重視するもの (『狭義のコミュニティ・カフェ』), (2)「イベントの提供」を重視するもの (『コミュニティ・スペース』), (3)「居場所・たまり場」を重視するもの (『地域の茶の間』), という3つに分けることができる⁷。

1.1.3. コミュニティ・カフェの新たな位置づけ

ところで, 介護保険制度の見直しの1つとして, これまで予防給付の中で実施されてきた要支援者の訪問介護や通所介護が, 2017年度までに, 市町村による「新しい介護予防・日常生活支援総合事業」へ移行することとなった。この新しい介護予防・日常生活支援総合事業は, 前述の訪問介護 (訪問型サービス) や通所介護 (通所型サービス) と, 介護予防・生活支援サービス対象者向けの生活支援サービスで構成されているが, このうち, 自治会単位の圏域における生活支援サービスの1つとして, コミュニティ・カフェや交流サロンが位置づけられている。これより, 介護保険制度の見直しの是非はともかくとして, コミュニティ・カフェの重要性が高まっていることは確かであろう。

札幌市社会福祉協議会が推進する「ふれあい・いきいきサロン」は, 「身近な住民どうしの『仲

³ 富山居場所&コミュニティカフェネットワーク・公益社団法人長寿社会文化協会 (2010), p.4.

⁴ Hokkaido コミュニティCafe クミアイ 資料.

⁵ 世古 (2007), pp.2-7.

⁶ 公益社団法人長寿社会文化協会 (2010). ここでは, 全国で約660ヶ所のコミュニティ・カフェがあげられている。また, 浅川 (2015) によれば, コミュニティ・カフェの数は「2,000とも3,000とも言われる」とされている。

⁷ 菅原 (2014), p.61.

間づくり』や『出会いの場づくり』を進める活動」であり、600ヶ所以上が登録されている。しかし、2010年に札幌市社会福祉協議会が実施した『札幌市地域サロン開催実態調査』によれば、週1回以上開催しているサロンは全体の20.2%にすぎず、参加費を徴収していないサロンが全体の43.5%となっていることから、ふれあい・いきいきサロンは、その継続性が十分に担保されているとはいいがたい⁸。

ではあるが、本稿では、コミュニティ・カフェが、前述のように、地域コミュニティの活性化を図っていくための人と人との「出会い・集い」の場としてだけでなく、自治会単位の圏域における生活支援サービスの1つとして位置づけられ、その重要性が高まっていることをふまえ、自治会・町内会の区域内で運営されているコミュニティ・カフェに着目していくものとする。

1.1.4. 自治会・町内会が運営する「ふれあいサロン」

自治会・町内会の区域内で運営されているコミュニティ・カフェの1つとして、「ふれあいサロン」があげられる。ふれあいサロンは、一般社団法人北海道町内会連合会（以下、道町連）が、1990年度から、北海道社会福祉協議会、北海道共同募金会との三者提唱により展開している「ひとりの不幸もみのがさない住みよいまちづくり全道運動」（以下、全道運動）のうちの活動の1つである。

この全道運動は、「地域のひとり暮らしの高齢者やねたきりの高齢者を介護する家族にとって、一番身近な町内会・自治会において、要援護者の発見・声かけ・助け合い活動を実践していただく」ことを目標としている。

そのため、単位町内会および地区連合会を実践地区として実施される、(1)交流活動、(2)在宅福祉サービス活動、(3)啓発活動、(4)調査活動、(5)ネットワークづくり、(6)マンパワー養成、の6つの実践活動に対し、道町連から活動費として年間3万円（単年の場合）の助成が行われている。2015年度の全道運動では、74の実践地区において実施される84の事業（実践活動）に対し助成が行われている。前述の6つの実践活動の中の交流活動の1つであり、2015年度の全道運動において最も多く取り組まれた（84事業中19事業）のが、ふれあいサロンである⁹。

ふれあいサロンとは、「身近な地域の町内会館などを拠点として、高齢者の生きがいや社会参加、健康づくり、閉じこもり防止を目的に高齢者と町内会の福祉部員などが一緒に企画・運営しながら、茶話会やレクリエーションなどの活動を定期的に開催し、楽しく、気軽に仲間づくりを行う活動」¹⁰であり、前述のコミュニティ・カフェの機能のうちの「地域の茶の間」に該当するものとして位置づけられる。

⁸ 菅原（2013a），p.43.

⁹ 一般社団法人北海道町内会連合会（2016），pp.3-5.

¹⁰ 一般社団法人北海道町内会連合会 資料（「あなたのまちにもふれあいサロン」）.

1.2. 先行研究

ふれあいサロンに関する先行研究は数多くみられるが、その大半は、ふれあいサロンにおける現状の紹介にとどまっている。そうした中、三宅・井関（2014, p.108）は、ふれあいサロンの問題点・課題として、(1)スタッフへの負担、(2)世代間交流ができていない、(3)利用者の固定化、(4)運営側に住民の意見が反映されにくい、という4点を指摘している。また、松浦・浦山（2010, p.532）は、ふれあいサロンの持続可能な運営のための条件整理の中で、運営管理者の悩みとして、(1)予算が少ない、(2)運営協力者の担い手がない、(3)運営管理者の担い手がない、(4)参加者が限定されている、という4点を指摘している。

こうした問題点・課題を解決し、ふれあいサロンの存続を図っていくための方策の1つとして、ふれあいサロン間のネットワーク化があげられる。少なくとも、ネットワーク化によって、(1)他のサロンからの来場者が増加し、利用者の固定化や参加者の限定が解消される、(2)他のサロンのプログラムを参考にすることができ、スタッフの負担が軽減されたり、運営管理者・運営協力者の新たな担い手が出現したりする、といったことが期待できるからである。

ふれあいサロン間のネットワーク化については、山下・中村・洲崎・松永・市場・有吉（2012, p.73）が、F県K町において、町社会福祉協議会が、10ヶ所の地区サロンと、社協サロン（モデルサロンとして立ち上げ後、スタッフの養成および情報交換の場として継続）から構成される「ふれあいサロンスタッフ会議」を立ち上げ、情報交換や意見交換を行っている、という指摘を行っている。

この他、例えば、「関係機関・団体との連携・協働の強化」（高野・坂本・大倉（2007, p.136））、「より多くの地域の方々や地域の機関・団体の支援・協力」（上條（2007, p.20））等のように、ふれあいサロンと他組織との連携・協力の必要性を指摘する先行研究はいくつかみられるが、ふれあいサロン間のネットワーク化について具体的に言及されているものは見当たらない。

1.3. 研究目的と研究方法

1.3.1. 研究目的

本研究では、ふれあいサロンがその存続を図っていくために、ふれあいサロン間で、どのようなネットワークを、どのようにして形成すべきか、について明らかにすることを目的とする。

1.3.2. 研究方法

本稿では、北海道剣淵町にある5ヶ所のふれあいサロンを事例として取り上げ、その運営を担っているサポーター（ボランティア・スタッフ）の代表者等に対して、ふれあいサロン設立の経緯、内容、運営体制、成果、成功要因（継続要因）、問題点・課題、今後の方向性等に関するインタビュー調査を実施した。そして、その結果に基づき、これら5ヶ所のふれあいサロンが存続を図っていくためのネットワーク化について、具体的に検討を行った。

剣淵町の5ヶ所のふれあいサロンを事例として選択したのは、(1)5ヶ所のふれあいサロンと

も年間10回以上（おおむね月1回程度）開催されていること、(2)5ヶ所のふれあいサロンとも道町連の助成金を受けた実績があること、(3)5ヶ所のふれあいサロンによって町内の主要な地区がおおむねカバーされていること、(4)小規模な自治体でありながら、5ヶ所のふれあいサロンが存在していること、等の理由によるものである。

2. 事例

2.1. 剣淵町の概要

北海道剣淵町は、札幌市から北東へ182 km、旭川市から北へ45.2 kmに位置している。札幌からの所要時間は、JRで約2時間～2時間30分、マイカーで約1時間50分である¹¹。1899年、屯田兵332名が入地し、戸長役場が剣淵に置かれた。その後、現・和寒町などを分村し、1962年に町制が施行され、現在に至っている。面積は130.99 km²、人口は3,317人（2015年12月30日現在）である¹²。総人口に占める65歳以上の人口の比率は35.9%（2015年1月1日現在）となっている¹³。基幹産業は農業であり、第1次産業の就業者が全体の41.5%を占めている¹⁴。

また、剣淵町は、絵本を題材としたまちづくりが進められていることで、全国的に有名である。1988年に「けんぶち絵本の里を創ろう会」が結成され、1991年に「絵本の館」がオープンした。現在、絵本の館には、世界各地の絵本約45,000冊が所蔵されているほか、絵本原画展、読み聞かせ、絵本づくり等の活動が行われている¹⁵。

2.2. 剣淵町におけるふれあいサロンの概要

剣淵町（以下、町）では、2005年1月から、それまでの18行政区を11の自治会（西町、緑町、仲町、元町、屯田町、旭町、南桜町、西岡町、西原町、東町、藤本町）に改め、それぞれの地域にあった活動を進めることになった¹⁶。

この11の自治会のうち、まず、仲町自治会の区域において、2011年6月、ふれあいサロン「ひまわり」がスタートした。その後、2012年1月、元町自治会の区域で「コスモス」、2013年1月、屯田町自治会の区域で「とんでん」、2013年8月、緑町自治会の区域で「そよかぜ」、2014

¹¹ 剣淵町ホームページ（<http://www.town.kembuchi.hokkaido.jp/access/index.php>）（2016年1月20日）。

¹² 剣淵町ホームページ（<http://www.town.kembuchi.hokkaido.jp/whats/index.php>）（2016年1月20日）。

¹³ 北海道保健福祉部高齢保健福祉課「北海道の高齢者人口の状況（高齢化率順）」（http://www.pref.hokkaido.lg.jp/hf/khf/jinkou/27_1_1shichousonbetsu.pdf）（2016年1月20日）。

¹⁴ 剣淵町『まち・ひと・しごと創生人口ビジョン・総合戦略』，p.10。

¹⁵ 剣淵町ホームページ（<http://www.town.kembuchi.hokkaido.jp/whats/index.php>）（2016年1月20日）。

¹⁶ 剣淵町ホームページ（<http://www.town.kembuchi.hokkaido.jp/area/index.php>）（2016年1月20日）。

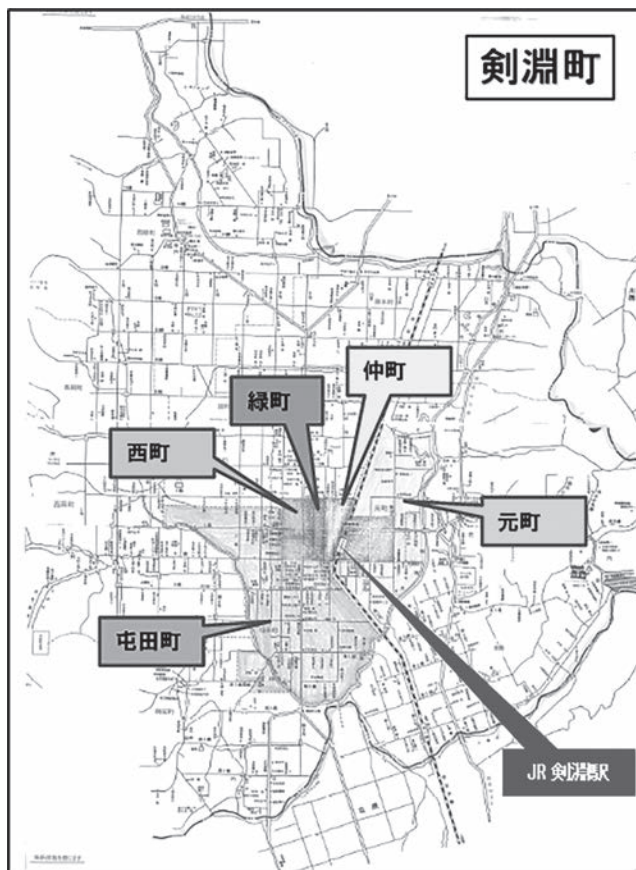


図1 ふれあいサロンが開催されている5ヶ所の自治会の区域
出所：剣淵町健康福祉課資料。

表1 剣淵町の5ヶ所のふれあいサロンの開催状況

名 称	開催日	開催時間	開催場所
仲 町サロン「ひまわり」	第1火曜日	10：00～12：00	ふれあい健康センター
元 町サロン「コスモス」	第4火曜日	9：30～11：30	元町自治会館
屯田町サロン「とんでん」	第4木曜日	9：30～11：30	屯田町自治会館
緑 町サロン「そよかぜ」	第3金曜日	10：00～12：00	絵本の館
西 町サロン「なごみ」	第3火曜日	9：30～11：30	ふれあい健康センター

出所：剣淵町健康福祉課資料。

年4月、西町自治会の区域で「なごみ」と、ふれあいサロンが順次スタートしていき、現在は、図1に示すように、町内の主要な地区をおおむねカバーする5ヶ所の自治会の区域において、ふれあいサロンが開催されている。また、この5ヶ所のふれあいサロンの開催状況については、表1に示すとおりである。

2.3. 事例

これら5ヶ所のふれあいサロンにおける設立経緯、内容、運営体制、成果、成功要因、問題点・課題、今後の方向性については、表2に示すとおりである。

3. 分 析

3.1. 現状と問題点・課題

このように、これら5ヶ所のふれあいサロンは、(1)自分たちがその必要性を感じたり（屯田町、緑町、西町）、町のアプローチがきっかけ（仲町、元町）となって設立され、(2)町社協（道町連）や町（地域包括支援センター、町教委等）をはじめとする諸組織・団体からの資源提供を受けながら開催している。また、これら5ヶ所のふれあいサロンは、(3)1回あたり15名以上の来場者があり、(4)来場者（高齢者）に楽しんでもらうこと（西町）、おしゃべりをしてもらうこと（仲町、屯田町）、元気になってもらうこと（元町）、来場者（高齢者）を見守ること（緑町）をミッション（目的）として、(5)体操・ふまねっと、合唱、講話等を中心としたプログラムを展開している。さらに、これら5ヶ所のふれあいサロンは、(6)4～13名のサポーターによって、(7)簡単な打ち合わせと、おおまかな役割分担の下で運営されており、(8)来場者から「楽しかった」という声が得られ、それがサポーターのモチベーションの向上につながっている。

しかし、これら5ヶ所のふれあいサロンは、(9)男性の参加者が少ない（仲町、緑町、西町）、来て欲しい人（独居老人、70歳代等）にはなかなか来てもらえない（元町）、もし、（プログラムが）決まらなければ次回の前に集まる（仲町）、サポーターの後継者（40～50歳代）を確保することが難しい（屯田町、緑町）といった問題点・課題を抱えており、(10)その解決策が今のところ見当たらない状況にある。

3.2. 解決方策としてのネットワーク化

こうした問題点・課題を解決するための方策の1つとして、これら5ヶ所のふれあいサロンのネットワーク化があげられる。

3.2.1. 来場者の増加

来場者については、「他地区の友人を連れて一緒に来ることもある」、「他のサロンに行く人もいる」（以上、仲町）、「他のサロンにも行くし他地区からも来る」（西町）といったふれあいサロンがある一方で、「他地区からは来ない」、「他のサロンにも行かない」（以上、元町）、「他のサロンには行かない」（屯田町）、「緑町自治会会員のみ」（緑町）といったふれあいサロンもある。たしかに、元町・屯田町・緑町の各ふれあいサロンでは、自治会の助成が行われているという事情もあるだろうが、「他地区の人から屯田町のサロンに行きたいという声がある」（屯田町）というニーズを取り込むべきである。

表2 剣淵町の5ヶ所のふれあいサロンにおける

	仲町「ひまわり」	元町「コスモス」
設立経緯	・包括支援センターからの働きかけ→キーパーソン（3月に転出）が呼びかけ、サポーターが集まる	・「町長と語る会」で仲町にサロンができることを知った→仲町のサロンを見学して、自分たちでもできそうと判断（仲町のサロンのサポーターの中に元町在住の人が2名いたということもある） ・サロン活動を町内で提案し、賛同を得られた人たちを中心にスタート
内 容	・資源提供者：町社協（3万助成（道町連））、ライオンズクラブ（1万助成、2014年度）、包括支援センター（体操指導）、町（健康センター使用料無料）、読み聞かせ団体、講話（道職員、交通安全協力隊）等 ・来場者：平均20名くらい（うち男性2名）、常連中心、他地区の友人を連れて一緒に来ることも（違う町内でもOK、全町放送で告知）、来場者負担なし（バス遠足の際は200円）、徒歩圏内が来場者の中心（自分で歩いて来れる人という事でやっている）、他のサロンに行く人もいるようだ、デイサービスとの掛け持ちはない、老人クラブとの掛け持ちはある ・ミッション：家にもっていないで知っている人と楽しい時間を、外に出て人と会い話をする（これが生きがい・元気の素になってほしい）、情報の集まる場（安否確認につながる） ・プログラム：体操、アコーディオン合唱、ふまねっと、折り紙、講話（消費者被害、熱中症・脱水予防）、歌 ・季節のイベント（クリスマス、収穫祭、豆まき）を組み込んでいる ・月ごとにプログラムに余裕をもたせたり、次から次へ展開したりしている	・資源提供者：来場者自身（テーブルにおく花を持ってきてくれる、食材を持参してくれる（農家の来場者）等）、包括支援センター（体操指導）、ライオンズクラブ（1万助成、2014年度）、町社協（助成金（道町連））、町（バスの無料貸し出し（旭山動物園に遠足へ）、協働のまちづくり補助金（イスを購入入））、自治会（町内会館使用料無料、諸経費（水道光熱費等）も負担）、テーブル・イスの購入、観戸やトイレの便座腰所の整備、2万助成（2015年から） ・来場者：16～17名、常連中心、サロンの存在を広めるため全町放送で告知、他地区からは来ない、他のサロンにも行かない、デイサービスに行く人が2人ほど、自分では来れない人（送迎はしない）、80歳代中心、男性6～7名（サロンに協力的（軽トラ提出、サロンのムーブメーカー的役割など）、「大通会」という地区団体に所属しているため来場しやすいのでは） ・男性の方がサロンを楽しみにしている（「月2回」という声） ・来場者が個々に「こうした方がいい」と提案してくれる ・男性は時間が余ったときなどに何か話したいようだが→難しい話が多いので、いつもはやり過ごしているが、たまには話させてあげられることも ・施設入居等で来なくなる人がいる反面、新規に参加する人もいる ・ミッション：お年寄りを元気にしたい ・プログラム：体操、ふまねっと、アコーディオン合唱、講話（消費者被害、熱中症）、カラオケ、フラダンス、福笑い、かるた、スライド上映、お誕生祝い ・はじめて来た人はその人の知り合いを見つけて隣に座ってもらうようにしている ・はじめて来た人はみんなに紹介し、拍手してもらう→これでなじみやすくなる ・2回に1回はゲストを招く（謝金なし）、呼ぼうと思えばいくらでも呼べる ・プログラムを何にするか悩むくらい
運営体制	・サポーター8名（うち3名はサポーターから声をかけられ、後からサポーターに）で運営 ・自治会はノータッチ ・毎回のサロン終了後に話し合い、次回何をするかだいたいのは決める（もし、決まらなければ次回の前に集まる） ・役割分担は特になく、自然と机を並べたりしている、できていないことをそれぞれが把握しそれをしていく ・それぞれが状況を判断して動く ・来場者に話し相手がいなかったら話し相手になってあげる ・折り紙をしているお年寄りがいれば他のお年寄りにも「やってみませんか？」と働きかけたりしている ・「みんなが来てくれる」、「何か手伝えないか」という気持ちからサポーターも継続している ・サポーターも参加者と一緒に楽しんでいるところがあるのでは	・サポーター9名 ・会計、代表のほか、毎回買出し当番を2名、というようにある程度役割分担が決まっている ・当初は男性サポーターが1名いた→正論を言う、堅苦しい、時間通りに進行しようとする→1年ちょっとでやめてしまった ・毎回終わってから反省会、次回何をするか大まかに決める→次回までの間にも1回打ち合わせを行い、そこで最終決定 ・事前の打ち合わせの際にサポーター同士の情報交換がなされる＝有意義 ・サポーターから何度かサロンに誘ってみたこともあるが、ありがた迷惑等の批判めいたことを言われたので、あまり介入しないようにしている ・サポーターからいろいろと聞きだすようなことをしないようにしている
成 果	・来場者から「すごく楽しかった」との声、悪天候でも来場者がいる→サポーターのモチベーションにもつながる ・当初より来場者が増加（4年前は15名→現在20名）	・「今回は楽しかったね」という来場者の声 ・来場者の増加（10～12名→16～17名） ・サポーターと来場者の交流（外で会うと声をかける） ・デイサービスの日とサロンの日が重複したが、デイサービスの日を変更してサロンに来てくれた来場者も
成功要因	・立ち上げ時のサポーターが一生懸命やって（来てもらいやすい工夫、参加者の気持ちに立つ）、今の土台を作ったこと	・サポーターも楽しくやっている ・「次回何をするか」と考えるとの脳が活性化になっているのでは
問題点・課題	・男性の参加者が少ない→どうやって来してくれるのか（親子連れでもかまわないという呼びかけはしているが） ・キーパーソンが3月にいなくなった（前掲）ので、まずは今までやってきたことを1年間継続して、それから考えよう	・来て欲しい人（独居老人等）が何人かいる→サポーターが強引に誘うわけにもいかないので、近所にいる参加者がついでに誘ってくれればと思うのだが ・70歳代にも来て欲しいが、「サロンなんて…」という感覚だった、「高齢者の行くところ」と否定されたり→80歳代にならないとサロンは身近にならないのでは ・これくらい（月1回）がちょうどよい、現状維持で今後も続けていければよい
今後の方向性		

出所：ふれあいサロンのサポーター等に対するインタビュー調査結果および剣淵町健康福祉課資料により筆者作成。

「ふれあいサロン」のネットワーク化に関する考察

設立経緯・内容・運営体制・成果・問題点・課題等

屯田町「とんでん」	緑町「そよかぜ」	西町「なごみ」
・将来の自分たちの理想的な居場所を作りたい ・1ヶ所に集めて大人数で、というのはサロンではない→人数でも慣れ親しんだ地域に自分たちの居場所を作りたい	・自治会の区域内にある公営住宅には独居老人や高齢者夫婦のみの世帯が多い→なかなか外出したがりない→外に引っ張り出すことが必要 ・介護予防の意味合いもある ・他のサロンでサポーターをしていた緑町在住の人に声をかけた ・その他にも緑町に戻ってやってみたいという人が多かった→サポーターの公募を検討したが、たくさん来ても困るので取りやめた	・自治会の区域内に住む女性から「サロンをやりたいので、自治会で協力してほしい」という相談を自治会役員が受ける→検討の結果、自治会としては関わりたくないことになる→自分たちでやることになった ・立ち上げに向けた会議を行い、サポーターを集めてスタートすることに
・資源提供者：JA 婦人会(冬場のみ手伝い、後継者としてひそかにもくろんでいる)、地域住民(周辺は農家→食材の提供)、町社協(助成金(道町連))、自治会(町内会館使用料無料、経費も負担してもらっている、助成の申し出があるが断っている(網をかけられるのがイヤ))、地元の町議(お茶) ・来場者：平均 15 名以上、夫婦で来る人が目立つ、男女比＝男 3 女 7、70～80 歳代が中心、常連が多いが時々新顔も、参加料として 100 円徴収(誰が誰だかわかっているから 100 円もらっても OK などでは) ・中心部では高齢者のベタング、パークゴルフ、ゲートボールの活動を通じての交流がある→他地区の人から屯田町のサロンに行きたいという声があるようだ ・農村地域で交通手段がない→他のサロンには行かない ・老人クラブもイヤ、1 人もイヤという人たちがターゲット ・ミッション：みんなで集まってお茶を飲んで笑う場 ・1 人でご飯を食べるのは寂しい、みんなでご飯を食べたい、そういう場 ・おしゃべりさせる、引きこもらせないことが目的 ・プログラム：体操、スライド上映、アコーデオンの合唱、講話(熱中症、食中毒、砂糖)、ふまねっと、漢字合わせ、お手玉 ・旭川へバス遠足、バイキング食事会、ベタング等、外に出ることも ・刺激が必要→小倉トーストを出してみたり ・行政のやるものとは違ふものを心がける(「隙間」,「意表をつくもの」) ・同じプログラムは二度とやらない ・来場者にアンケートをとり、それをふまえてプログラムを決定 ・体操の後に歌をうたう方が声が出る	・資源提供者：町教委(「絵本の館」利用料無料、使って欲しいというアプローチがあった)、町社協(年 3 万助成(道町連))、自治会(年 2 万助成)、ライオンズクラブ(年 1 万助成、2014 年度)、町(出前講座での講師派遣)、絵本の館スナップ(紙芝居、読み聞かせ) ・来場者：2014 年度平均 17.3 名(14～22 名)、緑町自治会会員の目(以前緑町にいてその後引越したという場合は OK)、他のサロンとの掛け持ちはない、男性は 3 名くらい、参加登録制度(登録者 37 名、来場者もスタッフも名札をつけている) ・ミッション：「あなた(高齢者)を見守るやさしい風」→「そよかぜ」の由来 ・プログラム：体操、ふまねっと、講話(砂糖、ゴミ分別、訪問販売対策)、読み聞かせ、折り紙、マジックショー、パズル、オセロ、スライド上映、ペットボトルボーリング ・年度初めに年間の大きなスケジュールを決めておく、勉強の要素(役場の出前講座、オレオレ詐欺対策(土別消費者協会)等)も必要 ・絵本の館は図書室の要素もあるもので、あまりうるさいものではない ・絵本の館は金曜日がわりと空いている→サロンも金曜日に、年度の日程をチラシで自治会全戸に配布、開催前日には無線放送をかける ・はじめての参加者には自己紹介をしてもらう	・資源提供者：町社協(年 3 万(道町連))、ライオンズクラブ(年 1 万、2014 年度)、包括支援センター(体操指導)、サポーターが食材や食器を持ち寄る(年 2 回食事を提供する際に) ・自治会としては会計を通す(助成金の受け皿)だけ、自治会が主体だったらうまいかない ・来場者：33～34 名、そのうち男性は 1～3 名、中心は 70 歳代、他のサロンに行くし他地区からも来る(自治会がやっているわけではないから)、来場者負担なし ・ミッション：来場者が楽しんでもらえればそれでいいのではない→そのことが安否確認や見守りにつながるはず ・かつて町内で行くし他地区からも来る(自治会がやっているわけではないから)、来場者負担なし ・プログラム：体操、ふまねっと、講話(振り込み詐欺防止)、折り紙、合唱、読み聞かせ、スライド上映、カラオケ、フラダンス ・はじめての来場者には自己紹介をしてもらう
・サポーターは 4～5 名 ・居心地のいい場所を提供するだけで、それほどのサービスをしているわけではない ・綿密な打ち合わせはしない、開催 2～3 日前に何をやるか若干の打ち合わせをする程度→来場者が当日まで何をやるかわからないこともしばしば ・記録、会計、代表、その他という役割分担 ・任せられるものはすべてお任せ(8 月にベタングをやるのが恒例→ベタング協会のメンバーの 1 人がいつも来場、その人に景品品もお任せする) ・来場者と同じ目線で(プライドを傷つけないように留意) ・「おいしい」と食べていければ、うれしくて次も来ようとなる	・サポーターは 11 名(60 歳代後半が中心)、毎回 8 名は来る ・毎回終了後、反省会を実施(来月のプログラムを決定、問題点の共有、欠席者の状況把握) ・開催 1 週間前に打ち合わせ(プログラムの詰め、折り紙をやるときは全員で練習) ・代表、庶務、会計、進行の 4 つの役割にサポーター 11 名を割り振る ・特にルールはなく、サポーター個人の判断で動く ・サポーターは高齢者のお世話をしたいという思い、仕事を休んで参加するサポーターも ・サポーター仲間とのおしゃべり、新年会や懇親会などが、サポーターのモチベーションにつながっている ・話をする人がいい来場者がいた場合は、話し相手になる ・サポーターの人たちはほかに何もボランティアを掛け持ちしていることが多い(1 人何役)	・サポーター 13 名(うち男性 1 名)、60～70 歳代が中心 ・代表、副代表、会計、その他→自然と役割分担ができてい ・毎回終了後 30 分だけ打ち合わせ(反省会、次のプログラムと茶菓購入を(交代で担当)の決定) ・あとは特に集まることはない(サポーターも来場者であるというスタンスから) ・来場者が後片付けも手伝うようになり、そして打ち合わせに参加してサポーターになるケースも(すでに 3 名) ・1 人である来場者にはサポーターが話し相手になる ・サポーターには目配りするように気をつけてもらう ・負担をなるべく少なく、休みたいときは休んで OK→サポーターが長く続けられるコツなのは ・サポーターが大変なサロンはやりたくない→サポーターも楽しめるように、負担のないように ・来場者が手伝ってくれるという気軽な雰囲気は大事 ・サポーターは 5～6 名もいればサロンはできる→現在 13 名もいるので十分に足りている ・サポーターも楽しんでいる
・最初は老人会とかがあるのになぜサロンなの？という認識→3 年経ってようやくサロンが理解されるようになった ・地域によってサロンが必要と思ってくれるようになったのでは ・来場者は毎月みんなの顔を見て安心しているのでは、おしゃべりでストレスの解消になっているのでは ・いつも来る人が来ないと安否確認をするように	・来場者に町や包括支援センターの講習会などへの参加を呼びかけると、参加するケースがある ・高齢者(80～90 歳代)に声を掛けるのは勇気のいることだが、サポーターたちは気軽に話しかけられるようになった、外で見かけたときも話しかけるようになった	・サポーター各人のすばらしさに気づく ・やったことがすごく喜ばれる(日帰りバスツアーを企画したところ「楽しかった」という声)
・無理をしないこと、いつも平々凡々 ・みんなに協力してもらえること、婦人会に食事のメニューまで決めてもらえる	・自治会の理解 ・サポーターが一生懸命なのが来場者に伝わる→「また来月来るよ」、「ありがとう」と来場者が声を掛ける→サポーターもやらなければと刺激を受ける	・みんなの役に立てればそれでいいという感じ ・サポーターに負担のないように、楽しく続けられるようにというのが秘訣 ・ボランティア経験の豊富な人はサポーターの中に 2～3 人しかいない→これがいいたのではない(経験豊富な人はあれもこれもやりたがる)
・サポーター側が徐々に来場者側になっていく→あと何年続けられるのか ・次の後継者はなんとか見えているが、次の次の後継者(40～50 歳代)が見えない→今の自分たちが一番サロンを必要とする時期にサロンがなくなってしまうのではという危機 ・地域のサロンに対するアレルギーがなくなりつつある段階→次の段階をどう持っていくのが難しい ・サロンをやりたいのか、ただみんなと一緒にやっているのが楽しいのか、で次の持って行き方が異なる→地域柄、慎重にやらないと、他での人間関係までおかしくなる	・病院等で行われている体操などとの日程の重複→サロンが第 3 金曜というのが定着しつつあるので、そう簡単には変えられない ・男性の来場者を増やしたい ・サポーターに若い世代(40～50 歳代)を引き込みたいが、みんな仕事を持っているので関わってもらうことが難しい ・来場者をサポーターにしていければ(受身だけでなく運営の側に回ってもらう) ・異世代間交流も考えたことがあるが、毎回実施していくだけで精一杯 ・2 時間で来場者が満足してくれているのかどうか ・ぎっちりプログラムを詰め込むのではなくゆとりを持たせることも必要か	・送迎をどうするか(冬場はなかなか来れない、でも 1 人のために迎えに行くというの難しい) ・男性の来場者をどう増やすか ・周辺部(農業地帯)ではサロン運営が難しい→まちなかのサロンに取り込めないか(町営のデマンドバスの運行等により) ・赤ちゃんや保育園児との交流をしたいと思っているが、いかにせん剣道には子供が少い ・サロン同士の合同サロンを年 1 回くらいやってもいいのでは→情報交換の場としても重要なのは、社協の会長にも話はしているが… ・将来、高齢者の残存能力がサロンによって維持される、引きこもりになる高齢者もなく、サロンが面白いものになっていく…といいと思う

そこで、ネットワーク化が図られれば、ふれあいサロン間の行き来が容易になることにより、来場者同士の「出会い・集い」、「交流・ふれあい」が活発になっていくであろう。その結果、来て欲しい人（独居老人、70 歳代等）にも来てもらえたり、男性の来場者が増加したりする可能性が出てくるであろう。

3.2.2. プログラムのスムーズな決定

また、プログラムについては、「同じプログラムは二度やらない」（屯田町）、「（ゲストを）呼ぼうと思えばいくらでも呼べる」、「プログラムを何にするか悩むくらい」（以上、元町）といったふれあいサロンがある一方で、「毎回のサロン終了後に話し合い、次回何をするかだいたいのあたりは決める（もし、決まらなければ次回の前に集まる）」（仲町）といったふれあいサロンもあり、すべてのふれあいサロンにおいて、プログラムが常にスムーズに決定されているというわけではない。

そこで、ネットワーク化が図られれば、ふれあいサロン間でプログラムのノウハウの共有が可能になり、プログラムの固定化を防ぐことができるであろう。その結果、前述と同様に、来て欲しい人（独居老人、70 歳代等）にも来てもらえたり、男性の来場者が増加したりする可能性も出てくるであろう。その他にも、プログラムの決定や実施に関するサポーターの負担が軽減されていくであろう。

3.2.3. サポーターの後継者の確保

さらに、サポーターについては、前述のように、「次の次の後継者（40～50 歳代）が見えない」（屯田町）、「サポーターに若い世代（40～50 歳代）を引き込みたいが、みんな仕事を持っているので関わってもらうことが難しい」（緑町）といった後継者の問題を抱えるふれあいサロンに加え、「サポーターの人たちはほかにもボランティアを掛け持ちしていることが多い」（緑町）、「サポーターが大変なサロンはやりたくない」、「（サポーターに）負担のないように」（以上、西町）といったサポーターの負担を懸念しなければならないふれあいサロンもある。

そこで、ネットワーク化が図られれば、サポーター経験の場（ふれあいサロン）が複数できることになり、サポーターを早期に育成することが可能となる。その結果、既存のサポーターの負担が軽減されていくとともに、後継者の確保も容易になっていくであろう。

このように、ふれあいサロン間のネットワーク化は、5 ヶ所のふれあいサロンがそれぞれ抱えている問題点・課題の解決に資するであろう。

4. 考 察

4.1. 町主導による垂直的なネットワーク化の難しさ

町（地域包括支援センター）は、すべてのふれあいサロンにおいて体操指導を行っており、この体操指導がプログラムの重要な部分を構成していることから、それぞれのふれあいサロンを開催するにあたっては必要不可欠な存在となっている。

また、町（地域包括支援センター）の呼びかけにより、これまで2回の「サロンサポーター研修」((1)「士別市健康づくり講演会」(2014年7月19日、参加者5名)、(2)「介護医療連携フォーラム」(2015年2月14日、参加者26名))が行われている。この取り組みは、ふれあいサロンのサポーター同士の「出会い・集い」の場の形成というだけではなく、町の主導による、ふれあいサロン間のネットワーク形成の契機としてもとらえることが可能である。

さらに、5ヶ所のふれあいサロンのサポーターの中には、他のふれあいサロンでもサポーターを経験したことがある人も多い（「仲町のサロンのサポーターの中に元町在住の人が2名いた」（元町）、「他のサロンでサポーターをしていた緑町在住の人に声をかけた」（緑町））。このように、他のふれあいサロンのことを知っているサポーターが存在することによって、ふれあいサロン間のネットワーク化は比較的容易であるようにも考えられる。

しかし、これまで、5ヶ所のふれあいサロンはいずれも、町や自治会に多くを依存することなく、サポーターが主体的に運営している。そのため、仮に、サポーターがネットワーク化の必要性を感じていたとしても、町が主導する、「上からの」ネットワーク化を図っていくことには、若干の抵抗感があるのではないかと考えられる。

また、5ヶ所のふれあいサロンが直面している環境状況（立地条件、自治会との関係、来場者等）は、必ずしも同一ではない。そのため、ふれあいサロン間のネットワーク化によって、ふれあいサロンの運営を標準化させ、効率化を図ろうとすることは困難なのではないかと考えられる。

したがって、現段階では、町の主導による、「町—ふれあいサロン」といった垂直的なネットワーク化を進展させるのは早計であると考えられる。

4.2. サポーター主導による水平的なネットワーク化とそのプロセス

そこで、まずはサポーターの主導により、それぞれのふれあいサロンのサポーター同士がゆるやかに結びつく、水平的なネットワーク化を図っていくことが望ましいと考えられる。

2015年11月16日、町（地域包括支援センター）が、5ヶ所のふれあいサロンのサポーターを対象として、「サロンサポーター学習会」を開催した。そこでは、まず、地域包括支援センターから、5ヶ所のふれあいサロンの内容（共通するプログラム、独自のプログラム）や、他の市町のふれあいサロンの内容についての紹介があり、次に、3つのグループに分かれて意見交換が行われ、そして、認知症についての講話が行われた。参加したサポーターからは、他のサロ

ンの内容がわかり参考になった、という意見が数多く出された。その後、他のサロンで実施されているプログラムを、自分たちのサロンでも実施しようという動きもみられつつある¹⁷。

この「サロンサポーター学習会」は、前述の山下・中村・洲崎・松永・市場・有吉（2012）の指摘にある「ふれあいサロンスタッフ会議」と類似の内容のものである。これから、サポーター同士がゆるやかに結びついていくためには、こうした情報交換の機会を、今後はサポーターの主導により継続していくことが求められる。

これを第1段階とすると、次の第2段階としては、5ヶ所のふれあいサロンが、それぞれ年1回程度、他の自治会にも公開可能な形式で、ふれあいサロン（公開サロン）を開催することがあげられる。これによって、来場者においてはふれあいサロンの選択肢が増えることになり、来場者同士の「出会い・集い」に発展していくものと考えられる。

さらに、その次の第3段階としては、「サロン同士の合同サロンを年1回くらいやってもいいのでは」（西町）という声にもあるように、例えば、現在、どのふれあいサロンも開催されていない毎月の第2週に、持ち回りで、それぞれが年1回程度、合同サロンを開催することがあげられる。その際、他のふれあいサロンのサポーターが当日の運営に協力（応援）することで、サポーター間のさらなる交流や、新人サポーターの育成（いわゆる O.J.T）につながっていくものと考えられる。

こうしたプロセスの中で、町は、前述の情報交換の場の設定（環境づくり）に加え、公開サロンや合同サロンへの来場の促進（全町への PR、来場手段の提供等）、主として新人サポーターへの研修機会の提供、といった後方支援の役割を担っていく必要がある。

このように、ふれあいサロン間のネットワーク化は、サポーターの主導により、町の後方支援を得つつ、いくつかの段階を経ながら進めていくべきであると考えられる。

5. おわりに

本稿では、ふれあいサロンがその存続を図っていくために、ふれあいサロン間で、どのようなネットワークを、どのようにして形成すべきか、について明らかにすることを目的とし、剣淵町にある5ヶ所のふれあいサロンを事例として取り上げ、これら5ヶ所のふれあいサロンが存続を図っていくためのネットワーク化について、具体的に検討を行った。

その結果、(1)ふれあいサロン間のネットワーク化は、ふれあいサロンがそれぞれ抱えている問題点・課題の解決に資するであろうが、(2)町の主導による垂直的なネットワーク化を進展させるのは早計であり、まずは、サポーターの主導によりサポーター同士がゆるやかに結びつく水平的なネットワーク化を図っていくことが望ましく、(3)そして、サポーターの主導により、町の後方支援を得つつ、いくつかの段階を経ながら、ふれあいサロン間のネットワーク化を進

¹⁷ 剣淵町健康福祉課資料。

めていくべきであると考えられることが明らかとなった。

今後、ふれあいサロン間のネットワーク化に関する分析を深めていくには、さしあたり、本稿での結論が他の事例においても妥当するか否かの検証が必要である。

謝辞

本稿は、日本 NPO 学会第 18 回年次大会における研究発表（2016 年 3 月 6 日）時の論文を加筆・修正したものである。

本稿の作成に際しては、以下の皆様からインタビュー調査および資料提供等のご協力をいただいた。

- (1)緑 町サロン「そよかぜ」サポーター 斉藤實氏 (2015 年 6 月 19 日実施)
- (2)西 町サロン「なごみ」サポーター 肥田輝美氏 (2015 年 6 月 19 日実施)
- (3)屯田町サロン「とんでん」サポーター 佐藤章子氏、中上邦子氏 (2015 年 6 月 19 日実施)
- (4)元 町サロン「コスモス」サポーター 大門則子氏 (2015 年 7 月 28 日実施)
- (5)仲 町サロン「ひまわり」サポーター 早坂洋子氏 (2015 年 7 月 28 日実施)

また、剣淵町健康福祉課の尾門紀子主幹には、資料提供およびインタビュー調査日程の調整等のご協力をいただくとともに、草稿段階で貴重なコメントをいただいた。

さらに、本研究の成果の一部は、北海学園学術研究助成（総合研究『北海道における発展方向の創出に関する基礎的研究』）を受けている。以上の関係各位に深く感謝する次第である。

なお、本稿に事実誤認および解釈の相違等があれば、それはすべて筆者の責に帰すべきものである。

参考文献

- 浅川澄一（2015）「行政が目論む『安上がりの介護へ転換』の実態」,ダイヤモンドオンライン『医療・介護 大転換』（第 39 回）(<http://diamond.jp/articles/print/78587>)（2016 年 1 月 16 日）。
- 一般社団法人北海道町内会連合会（2016）『ひとりの不幸もみのがさない住みよいまちづくり全道運動 平成 27 年度実践地区実施報告書』。
- 上條秀元（2007）「高齢者の居場所づくりについての一考察—『ふれあいサロン』の活動に即して—」,『生涯学習研究』（宮崎大学生涯学習教育センター研究紀要）12：1-20。
- 公益社団法人長寿社会文化協会（2010）『コミュニティカフェネットワーク・ガイドブック 2010』。
- 松浦健治郎・浦山益郎（2010）「地域住民によるシルバーサロンの持続的運営が可能な条件整理」,『日本建築学会東海支部研究報告書』48：529-532。
- 三宅康成・井関崇博（2014）「農村地域における『ふれあいサロン』の実態と課題」,『兵庫県立大学環境人間学部 研究報告』16：99-109。
- 世古一穂（2007）『コミュニティ・レストラン』,学陽書房。
- 社団法人長寿社会文化協会（2007）『コミュニティ・カフェをつくろう』,学陽書房。
- 菅原浩信（2013a）「北海道におけるコミュニティ・カフェのマネジメント」,『開発こうほう』（一般財団法人北海道開発協会）598：43-47。
- 菅原浩信（2013b）「コミュニティ・カフェによる地域コミュニティの活性化」,『日本フードサービ

ス学会年報』18：38-52.

菅原浩信（2014）「コミュニティ・カフェが北海道を変える？―地域が元気になるために―」，公益財団法人北海道生涯学習協会『平成26年度 道民カレッジ「ほっかいどう学」大学インターネット講座』：60-66.

高野和良・坂本俊彦・大倉福恵（2007）「高齢者の社会参加と住民意識～ふれあい・いきいきサロン活動に注目して～」，『山口県立大学 大学院論集』8：129-137.

富山居場所&コミュニティカフェネットワーク・公益社団法人長寿社会文化協会（2010）『コミュニティカフェ&居場所ガイドブック 富山県版』.

山下理恵子・中村登志子・洲崎好香・松永里香・市場正良・有吉浩美（2012）「急激な高齢化が進むK町における高齢者ふれあいサロン事業の評価」，『日健医誌』21(2)：69-77.